

# 女たち

Nobuo Kojima

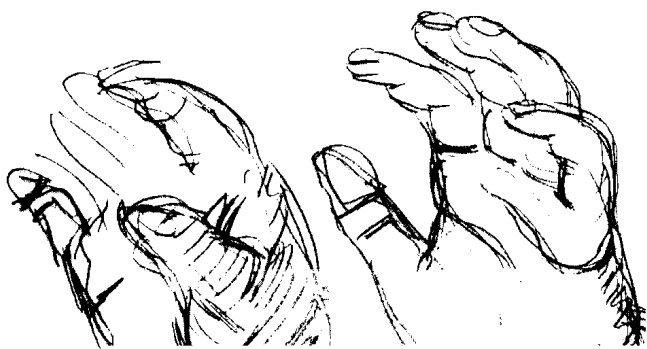
小島信夫



# 女にち

Nobuo Kojima

小島信夫



# 女たち

昭和五十七年五月十日 初版印刷  
昭和五十七年五月二十日 初版発行

著 者 小島信夫

発行者 清水 勝

発行所 株式会社 河出書房新社

東京都渋谷区千駄ヶ谷二―三二―二

電話 四〇四―一二〇一（営業）

四〇四―八六一（編集）

振替口座（東京）〇―一〇八〇二

印刷 暁印刷株式会社

製 本 加藤製本株式会社

©1982 Printed in Japan

定価はカバー・帯に表示してあります

目次

女たち 5

レオナルド・ダ・ヴィンチの夜 31

返信 63

有縁 107

『一寸さきは闇』 147

あとがき 194

装 装  
幀 画

多 有  
田 元  
進 利  
夫

女  
た  
ち



女  
た  
ち



昨日ロシアの一九二五年うまれの演出家のノートを読んでいたら、『ロメオとジュリエット』のジュリエットとそれをやったある役者のことがくりかえしのっていた。演出家は十年間にわたって何度もこの作品を手がけてきた。

バルコニーにジュリエットが出てきてロメオがそこにいないと思って夜に向って語りかけるとロメオがきいている。そのときから自分のいった言葉にびっくりしてジュリエットは部屋の中へかけこんだり、またとつぜんあらわれてそこにロメオが顔を出しのぞきこんだものだから、また部屋にとびこんだりする。ロメオはバルコニーへへっぽってくる。バルコニーと地面との間には鉄製の梯子がかかっている。ロメオはそこ

に足をかけ、のぼりかけてきてバルコニーを見あげると落ちんばかりになってのぞいているジュリエットを発見する。これはもっと前の、彼女が二回めにとび出してきたときのしぐさだったかもしれない。

とにかく彼女はこれ以上うつむいたら落ちてしまうほどのぞきこんでいる。(この本にはそのところの写真が入っている)

この少女は、あの有名な、あどけなくて、真剣でズルい文句をはいた。「暗闇の中で私の秘めた思いの中に忍びこんだのはどなた？」

演出家は、これを演じた女優をほめている。衣裳合わせのときなどには顔をしかめたり、文句をいっていたりしていたが、芝居がはじまると、十四歳になってしまった。はじめて乳母と両親からはなれてひとりになった自分の中に何があるのか、自分でも分らず、その自分の中にある衝動にあやつられた。「暗闇の中で私の秘めた思いの中に忍びこんだのはどなた？」というような文句を投げる前から、あどけなく、真剣でズルく動きまわり、そうして、落ちんばかりにのぞきこんだ。

この場面が終つて楽屋にもどつてくると、女優は鉄製の手すりや梯子がぶつかつてアザが出来たといつてブツブツいった。どうして痛くないようにしておかなかつただ、といった。

女優は、とつぜん襲つてきた解放が、もうすぐ起る不幸の前ぶれだということに不平をいつているのであらう。衣裳合わせのときに顔をしかめていたのも、自分の運命を考えてのことであらう。

演出家はそういうことを書いていなくて、顔をしかめるとか、ブツブツいうとかいつているだけだ。だが、たぶん彼女はそうだったのであらう。おそらくそのことを演出家は知っていたのであらう。ジュリエットは、いつ誰に文句がいえよう。永遠に私を知ることもないその女優は、もちろんそのときもジュリエットであつた。

一九二五年うまれのそのロシアの演出家が敬意を払っているロシアの役者は、長い芝居がおわつて楽屋にもどつたあと、椅子に腰をかけたまま汗もぬぐわず、息をはずませ、物もいわず、誰の顔も見ずじつとしていた。一時間もそうしていたあと、人物

の衣裳や化粧のままで帰って行った。そういうわけだから、ジュリエットをやっていた女優もその通りであつたと思われる。それに彼女は何しろ舞台の上でさつきまで死んでしまつていたのであつた。でなければ彼女は彼女自身、つまりジュリエットにたいしても、悲劇にたいしても恥ずべきである。

「私はその女優にも裏切られたといわれたことがある」

と演出家は、いつている。私は決して自分の趣旨というものをおしつけないことにしているし、右へ何歩行けとか、テーブルの左に在るべきだとかいったりしないようにしているし、演出家は教師と同じで、どのひとりとだけと特に話しこんだりしないように心がけている。そしてその女優は私がとくに買つてゐるのだから、理解してゐないとかいふとか、というような初歩的でない方をされることなど思つてもいゝなかつたところがある日、彼女が私に私を理解してゐないといつたのであつた、と書いてゐる。いったい演出家はこのことで何をいいたかつたか、忘れた。私は小説家でもあるが、教師もしている。つとめ先の私の部屋の向つて左となりこの演出家より大分年

下の教師がいて、私が「演出家ノート」を読んでいるときに、彼の咳払いや、湯をわかす音がきこえている。

私は今から、七、八年前にほかの教師仲間と彼の家へ出かけたときに、家で待っていた彼がキッチンにいるその妻に何か相談をもちかけると、

「どちらでも」

といったことをもヒントにして、『どちらでも』という題の台本をかいてこの雑誌にのせた。前々から頼まれていて半ば苦しまぎれのものだが、予定どおりに、六本木のある小屋で芝居になった。

私の友人がキッチンにいた妻に向っていった内容はもう忘れてしまった。友人は、「どちらでも」といわれたってほとんど気にとめなかったかもしれない。彼女はまた、夫が自分のいった一言を氣にとめると全然思わなかったのであろう。だから、私が書いた『どちらでも』は私が仲人をしたこの夫婦とは無関係と断言していいくらいのものだ。いまいったように、私は彼にたのまれて仲人をしていた。といって、私がたった

一言をヒントにしたということは、それだけのことはあるにはあった。

私のその芝居は、（もううろおぼえにしかおぼえていないが）都心をはなれたあるホテルの一室へもう一度やりなおすか、あるいは考えなおすために、夫婦が身の廻り品だけでもってベッドのある部屋へ入ってくるところから始まり、二度の休憩時間は別としてそのまま二人きりで幕がおりるまで芝居をつづけるというものであった。

男の役者は、一般には『事件記者』というテレビの当り番組の中心記者をしていたことで知られていた。女優はこのところしばらくいい役がついていないが、自分もこのさい飛躍したいと思い、劇団もそう考えているある役者で、私自身はその名をぜんぜん知らなかった。そのようなことに何の問題があらう。彼らが舞台のうえで、長々と演じてくれればそれでよいので、彼らはそのために懸命になってセリフをおぼえ、そのセリフが生きるように工夫をし、演出家は、またそのために手を貸し、彼らを拘束せず、そうして、大局は見きわめていて客の前に幕をあげて見せればそれでいいのである。それ以外何を思いわずらうことがあらう。何を作者にうかがったり、心理を

問うたり、あのチェホフ氏をおこらせたようなムダなことをせんさくしたり、する必要があろう。二人きりのこんな長い芝居があるかって？　そういうことをいうとすればこっちはただ冷淡になるだけのことだ！　二人きりで、二人きりでやりなおしにこのホテルへきた二人のように辿ってみたい。このくらいの時間、二人きりでいて、いろいろいたりしたり、過去をつついたり、未来へ向って夢をえがいたり、挫折したり、そうしてかんじんのときに、夫のマジメな、せっぱつまった真剣な、ズルい問いにたいして、

「どちらでも」

といった返答をすることがある。そのとき彼女は自分のいった文句の意味を気づいていない。彼もまた自分のいったことの意味や、タイミングを気づいていない。気づいているとすれば観客だけである！　その観客のことだって二の次である。

彼と彼女は話しあいがついて寝るべき二つのベッドのまわりで、まず何から話したらいいのだろう。その前にどうしてベッドが二つあるのかということについて反応を

示した眼つきを、彼女がしてもいいであろう。なぜかというたぶん予約をしたのは彼の方だからだ。しかし、そういうことにまったく気がつかないのが彼かもしれない。すくなくとも気を廻してシングルベッド二つの部屋を申込んだのかもしれない。彼女はそんなことぜんぜん問題にしていなくてもありうる。彼女はそもそもここへきたのは、仲直りをする気持は三割ぐらいしかなくその三割も条件づきで、そのことをこそいいにきたのかもしれない。彼女は二人が別れるに至ったのは、彼のせいだと思っている。そのことをなっとくさせ、過失をつぐなうことができたと思うようなことが証明されるかどうか見にきたただだったのかもしれない。その過失というものの正体は何であつただろうか。

彼ら夫婦は、幸か不幸かベッドにはまったく注意を払わなかったようだ。窓の外に見える風景のことから話しはじめた。彼が今どきとれるホテルとしては上等の方で、そのしょうこに、窓の外の紅葉の景色はけっこう見られるといったからであつた。そういったのは、部屋の中が上等といえず、途中の廊下も、それからホテルへくる途中